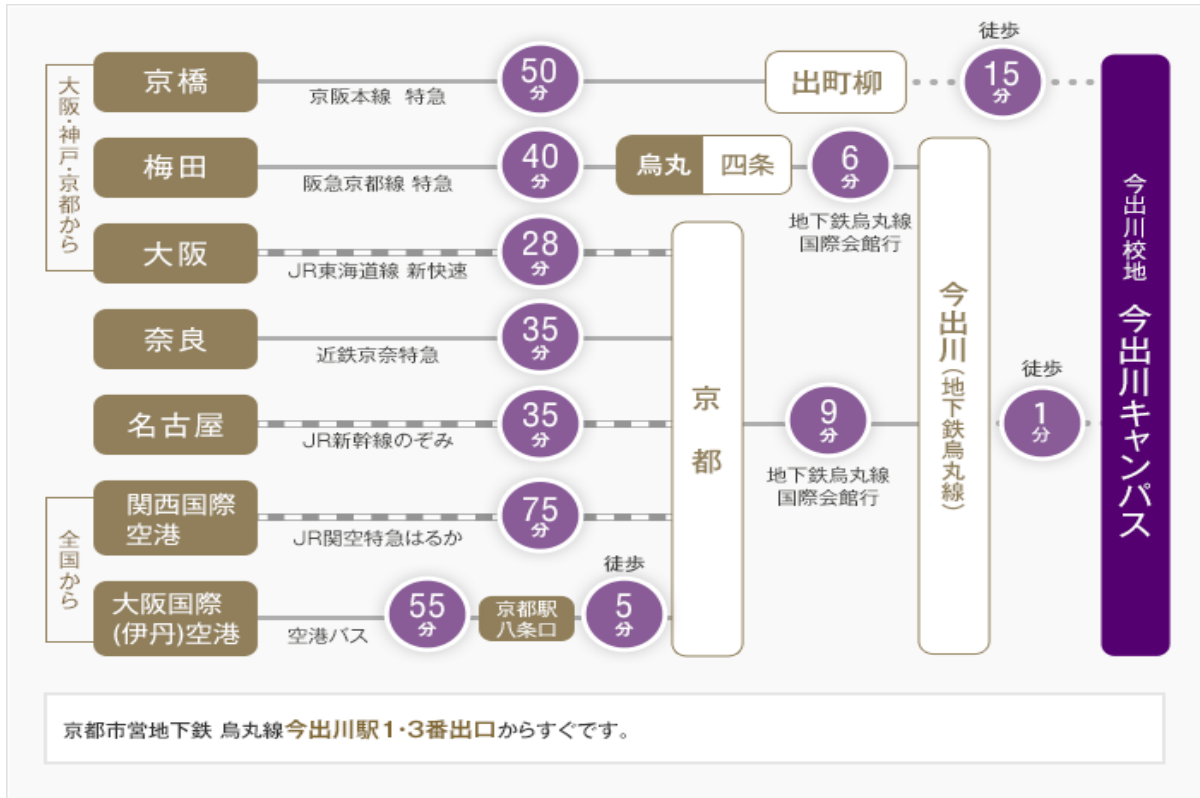


アクセス



二〇一六年十二月説話文学会・仏教文学会合同例会
シンポジウム「大名文化の編成と八幡信仰」趣意文および発表要旨

十六世紀から十七世紀へと続く、いわゆる中世近世移行期における文化的様相には、武家の人々がさまざまな形で関与していた。長く続いた戦国の世を経て、いくさのない世を志向する社会体制が確立していく過程は、將軍家や諸大名家を仰ぎながら全国に分布していた武家関係者たちが創出し、継承し、再編していったさまざまな文藝・文化をめぐる動態とどのように結びついていたのであろうか。

そうした問題について、本シンポジウムでは、中世以来、武家が広く関与してきた八幡信仰を窓として考えてみたい。具体的には、十七世紀に入って幕藩体制を担っていくことを自覚するようになった諸大名家が、八幡信仰と向きあいながらそれぞれに取り組んでいた、自家と自藩の歴史と文化を編成しなおす営みの実態と、それにかかわる言説の力学に光をあてることになる。

こうした課題に取り組むためには、当時の社会的立場や国元の所在地、歴史的環境が異なる諸藩・諸大名家の事例を幅広く目配りすることが求められる。そして、それらを見渡すなかで、各大名家の文化が備えていた普遍性と固有性、偏在性を発見することが大きな課題となる。本シンポジウムでは、あらかじめそうした遠くの課題を射程に入れながら、個別具体的な事例に即した議論を交わすことを試みたい。

こうした問題関心にもとづき、本シンポジウムではまず、龍澤彩氏が、これまで尾張徳川家の伝来品を精査してきた経験と成果を踏まえて、八幡信仰と関わる「大名道具」に与えられた意味に注目しながら、同家にとつての八幡信仰が十七世紀の脈絡のなかで再編成されていく様相を報告する。続いて、中根千絵氏が、尾張藩主徳川義直自序『神祇宝典』の記事と西三河の家康伝承を分析することで、尾張・三河という地域における「八幡再興」の動きを跡づける。そのあとに、小助川元太氏が、尾張藩の問題からはいったん離れて、湯月八幡宮の再興・造替をめぐる伊予松山藩松平家の動向を取りあげる。ここでは、靈夢にまつわる言説が鍵をにぎることになるだろう。立場や地域を異にする両藩の動きがいかなる相似形をなし、またどのような個別的なかが、おのずと問われることになる。

なお、当日は、全体討論にさきだつて、鈴木彰が小報告として、三人の発表から浮上する問題のいくつかに関わる、他藩・他大名家（萩藩毛利家など）における事例を補足するなどしながら、問題の整理と論点の提示をおこなうつもりである。「文責・鈴木 彰」

発表要旨

尾張徳川家の大名道具に見る八幡信仰

龍澤 彩（金城学院大学）

本発表では、尾張徳川家における八幡信仰を同家に伝来した「大名道具」という観点から概観する。例えば「八幡大菩薩像」（鎌倉時代・十四世紀）は、尾張家の江戸・市ヶ谷の上屋敷庭園内にあった八幡宮のご神体として祀られていた。画像を覆う羅の帳が附属する模本も現存しており、礼拝の状況を窺わせる史料としても貴重である。大名庭園は、將軍の「御成」を迎えるなど、儀礼と社交の場であったとされているが、そうした大名家の権

威を示す一つの「装置」において神仏画が用いられたことを示す例として着目される。また、同家には「石清水八幡宮遷座縁起絵」（鎌倉〜南北朝時代・十四世紀）といった作品も伝来しており、中世に生み出された古画の中には、近世には武家の八幡信仰を支える大名道具という役割を与えられ、新たな文脈で享受された作例もあつたことがわかる。そのほか、発表では、尾張徳川家における八幡信仰を示す伝来品や道具目録等の史料を報告したい。

中世近世移行期における尾張・三河の八幡再興の〈物語〉

中根 千絵（愛知県立大学）

本発表では、正保三年（一六四六）二月に成った『神祇宝典』（尾張藩主徳川義直自序）と西三河の家康伝承に関わる八幡の再興の例を採り上げる。『神祇宝典』序には、八幡や伊勢と同様、あらゆる神の名（本地垂迹）を明らかにし、祭祀を行うことが政治上重要であると記されている。『神祇宝典』において八幡と関わって位置付けられる尾張の神社は、そもそも八幡の称を有さないものが多く、江戸時代に入って八幡神として位置付けられたようにみえるものが多い。その様相を『八幡宮本紀』（貝原篤信著）や地誌等から眺め、八幡再興の仕組みと意味を考えてみたい。

一方、西三河の家康に味方する八幡神という〈物語〉の生成は、軍記物語において語られてきた八幡が平家を見捨て、源氏に味方する物語と響き合っているものと考えられる。八幡再興の仕組みが源氏の血筋と関わるものと考えられる時、尾張と西三河の八幡再興の動きは、一つの方向にその意味合いが収斂されるのではなからうか。『尾藩世紀』等の資料も提示し、上記のことを考えてみたい。

湯月八幡宮の再興と武の物語

小助川元太（愛媛大学）

中世近世移行期の地方の大名家における八幡信仰の実態とその意味について、在地の八幡宮との関わりをもとに考察する。愛媛県松山市にある伊佐爾波神社は、湯月八幡宮として歴代の伊予松山藩の藩主から崇敬されてきたが、そのきっかけは文禄四年（一五九五）に伊予松前に入部した加藤嘉明が、関ヶ原合戦後に石高を増加させ勝山城（現松山城）を築城した際に、第一の祈願所として位置づけられたことによる。その後、伊予松山藩の藩主が久松松平家になり、三代目の定長によって、寛文七年（一六六七）に石清水八幡宮を模した形で造替され、現在に至っている。ところで、嘉明の湯月八幡宮崇敬・再興と定長による造替の背景には、霊夢による武勲という共通するきっかけがあつたとされている。本発表では、この伊予湯月八幡宮再興・造替と「武の物語」ともいうべき伝承との関係を中心に取り上げ、それらが意味する問題について考察する。

〔小報告〕 「大名家の歴史意識と八幡宮・八幡縁起——主に萩藩毛利家の事例から——」

鈴木 彰（立教大学）

本報告では、近世の大名家が領内の八幡宮やその由緒の物語としての八幡縁起との関わりから自家・自藩の歴史を意識化していた様相について、主に萩藩毛利家の例をもとにしながらか検討する。